

地誌考証と偽書批判

― 相原友直『平泉雜記』の義経蝦夷渡り説否定論を中心に ―

菊池 勇 夫

はじめに

義経蝦夷渡り（不死）説は江戸時代の一七世紀後期に語られはじめ、一八世紀に入ると物語がいつそう展開し、それに伴い東北・北海道の各地に義経伝説の遺物・遺跡が見い出され紹介されるようになる。^①このような義経物語・伝説の流行に対して、それは史実ではなく偽作だとする批判、否定の論も江戸時代から少数派であるが存在した。そのうち徹底した論駁を加えていたのが、本稿で組上に載せる仙台藩の相原友直であった。

相原友直は元禄十六年（一七〇三）に陸奥国気仙郡高田に生まれ、仙台に出て医学や経史を学んだのち京都に遊学した。^②享保十四年（一七二九）に帰郷し、医業のかたわら、『平泉実記』（宝暦三年・一七五三刊）、『平泉旧蹟志』（宝暦十年）、『平泉雜記』（安永二年・一七七三）の平泉三部作や『気仙風土草』『松島巡覧記』など、仙台領に関する地誌類の執筆を行ない、天明二年（一七八二）西磐井郡赤荻村^{あかおぎ}で生涯を終えている。

友直にとって磐井は、自分の祖先が胆沢郡の采地にあわせて宅地を賜った郡で、平泉の隣であるその村すなわち荻村には幼年の頃よりたびたび遊んだという。彼には「山水の癖」があつて、勝地佳境を尋ねて遊ぶことが好きで、かつて平泉達谷の遺蹟を訪ねたとき、その地に関する記録を探したがなく、それが『平泉実記』を著すきっかけとなった（『平泉旧蹟志』跋文）。『平泉実記』は、古史旧記に散見する記事を集めて、頼朝の泰衡征伐を中心に盛衰を述べたもの、『平泉旧蹟志』は僧徒村老の口碑や世父先人の譚話に基づいて、藤原氏時代の中尊寺以下の堂社・仏像・寺宝や跡地などを述べたもの、そして『平泉雜記』は先の二書に漏れた、怪異かつ兒童の談話と違わないものであつても捨てがたくて、平泉に関する「正史」から「郷説」にいたるさまざまな事項を考証したもので、結果的に三部作となった。

これまでも相原友直による義経蝦夷渡り説批判については紹介されてきたが、偽書・偽作批判とともにそれを可能にした友直の史実考証の態度や方法についてはまだ立ち入った検討がなされることがない。本稿はその点に取り組もうとするものである。あわせて伝説研究をめぐる地域史の課題を意識して論ずることになる。平泉三部作を対象とするが、『平泉雜記』が最も詳しく論じているので、それを中心に扱っていくことになる⁽⁴⁾。

一 義経蝦夷渡り説の否定——義経の死をめぐる——

相原友直がどのように当時跋扈しつつあつた義経蝦夷渡り説を全面的に否定していたのか、まずはそのことから確認していこう。『平泉雜記』に「義経渡蝦夷」の項が立てられている。

義経が蝦夷島へ落ちて行つたというのは「古来ノ俗説」であり、これを「実説」、あるいは「妄誕」であるとして、

人々のその好みや信ずるところによって是非を論じ合っている。『東鑑』『盛衰記（源平盛衰記）』『義経記』『太平記』『剣巻』などを信ずる者は義経が平泉で自害したという。いっぽう、「近世」の『武家評林（本朝武家評林）ノ附記』（遠藤元閑、元禄十三年・一七〇〇刊）・『義経勲功記』（馬場信意、正徳二年・一七二二刊）・『鎌倉実記』（加藤謙斎、享保二年・一七一七刊）等の書を信ずる者は、義経が蝦夷へ落ちて行ったという。しかし、それらの説は「家伝」、「異人ノ譚話」、「古記ノ説」、「唐ノ書ニ出タリ」、あるいは「蝦夷ニテ死タリ」、「唐へ渡り仙人ニナリタル」などと、「造り出ス者」が自分の「慮」にまかせて、それぞれ異なったことをいうので「帰一」の論がない。「実地」を踏む者はそのような説を採ることはありえない。察するにそれらは「俚俗ノ談話」に基づき、「新奇ノコト」をまじえて書にし、「世ノ愚昧者」に売ろうとするものである。そうした書を見ると、「地理ノ違ヒ」や「文章ノ妄」が多くあり、信じがたいことのみである。したがって、「予（友直）」がかつて『平泉実記』を著したときには、史実を『東鑑』に採って他の疑しいものには求めなかった。これは「私論」を捨て「公論」に従う、「野史」を取らず「正史」を採るという考えに立っているからである。

およそ、このように友直は述べている。とりわけ「近世」（近頃の世の中）に出版された、義経が蝦夷（蝦夷島）に「落行」したとして新奇の説をまちまちに唱えている『蝦夷勲功記』などの「野史」に批判の矛先が向けられている。それは「実地」を踏まえていないからであり、そのために、地理の違いや文章の齟齬がめだち、信用に値しないというのであった。義経最期の地である平泉の地誌・史実考証を行ってきた友直にとってみれば、歴史（地域史）を歪曲する我慢ならないことであり、それらの近世の書物は、今日流に言えば大衆迎合的商業主義に陥って虚妄な論をふりまいていると映ったのである。

義経蝦夷渡り否定論は平泉三部作の最初の作品、『平泉実記』から一貫していた。『平泉実記』の「源義経最期並秀衡病死」の項に義経の死をめぐる史実の考証がある。頼朝の威に畏れた泰衡が文治五年（一一八九）閏四月晦日に衣川の館に押し寄せる。義経も家人伊勢三郎義盛ら（九名の姓名列記）をもって防がせ、いずれも最期の軍として身命を惜しまず戦い、討死あるいは自殺した。義経は持仏堂にひきこもり、二二歳の御台所と四歳になる女子を害して、その身も自害した。行年三一歳であった。およそこのように本文を記したうえで、義経の郎従が討死したというのは『義経記』の説で、『東鑑』には載っていないが、平泉の地に「郎従ノ墓」や「討死ノ旧蹟」などが今に残っている。『義経記』が信用できるとして、その姓名を載せたと注記している。友直の『平泉旧蹟志』には、中尊寺山下の田の中にある亀井松は亀井六郎重清の塚、鈴木松は鈴木三郎重家の塚、中の瀬は弁慶立往生の瀬あるいは生害の所であるなどと、義経郎従の者たちの墓や死に場所の言い伝えが紹介されている。

義経の最期については、『平泉実記』の右の本文の後に、「按スルニ」として友直の見解が述べられている。義経が平泉高館で自害したことは『東鑑』の説であり、『盛衰記』・『義経記』も同じである。然るに「近代」に書かれた「諸書」には、義経が平泉を逃れて蝦夷へ落ち行き、そこで死んだといったり、あるいは蝦夷より金国へ渡ったといったりしているが、これらは皆「怪異牽強ノ妄説」で信ずるに足らない、ゆえに今はこれを採らないと言明している。

『東鑑』に基本的に依拠しながら、『盛衰記』などの物語や地元の言い伝えなども参照しながら、史実（本文）を確定・叙述するという方法的な態度であった。『平泉雜記』に、かつて『平泉実記』を編んださい、「野史」によらず「正史」＝『東鑑』に拠ったとして、正史主義の立場を再確認していたのは、そのことを意味している。したがって、友直における正史・野史・俗説（郷説）の各種言説の階層・序列構造が問われなくてはならないが、「正史」もまた

「実地」に反証されうることを含めて、詳しくは節を改めて述べることにしたい。

『平泉雜記』ではさらに詳しく義経自殺後のことが考証されている。「義経首」の項では、『鎌倉実記』の説を批判する。『鎌倉実記』は、義経の首が『東鑑』に文治五年（一一八九）六月十三日腰越に至ると書かれているのは伝享の誤りであると記していた。四月晦日に討った者を六月まで延引するはずがないという推測からであった。これに対して、友直が「按ルニ」は、『鎌倉実記』の作者が『東鑑』の全編を読んでいないことからくる誤り（「不読ノ誤」）だと指摘する。『東鑑』によれば、奥州泰衡の飛脚が五月廿二日申刻に鎌倉に参着して、去月晦日に予州（義経）を誅した、その頸は追って進ずると言上している。鎌倉ではその頃、鶴岡の塔を建立しており、六月九日がその供養であったので、義経の首を左右無く（差図なく）鎌倉に持参してはならない、途中に逗留すべしという飛脚を六月七日に奥州に下した。これによって、わざと延引して六月十三日腰越浦に至り鎌倉に言上したという。このような流れのなかで読めば何もおかしくはない、というのが友直の見解であった。

また、『鎌倉実記』が義経の首だと名づけて鎌倉殿に実検させたのは義経の身替りとなった杉目行信だと記していることに對しても、首実検に頼朝から和田義盛・梶原景時が腰越に派遣されたが、もしその首に疑いがあれば景時がそのままに打ち過ぐすことは考えられない、景時は性質が奸佞で讒言をつねとし、義経に遺恨のある人である、『鎌倉実記』の説は信ずるに足らない、ゆえに「野史ノ妄説」は採らず「正史」にしたがうと、友直は述べている。『鎌倉実記』は義経生存説が今日にいたるまで拠り所としてきた推測の発信源のひとつであるが、『東鑑』のある部分を取り出して推測・曲解・捏造するのを戒め、全体の史実の文脈のなかで理解しようとする、友直の考証態度が窺えよう。

「白旗大明神」の項には、義経の首を埋めて祭ったのが相州白旗里の白旗大明神であること、一説に藤沢に埋めたとも伝えること、伊賀国伊予大明神社は源義経の霊を祭るとのこと、そして『鎌倉志』がいうに鎌倉の頼朝社は白旗明神と号することなどを紹介し、そのあとに平泉高館の義経堂について記している。友直の説明によれば、館（高館）の跡には古来より墳墓があり石があった。その石は俗に義経が腰をかけて自殺した石だといわれており、石の上に祠堂が立てられていた。天和三年（一六八三）、仙台藩主伊達綱村によって祠堂＝義経堂が建立されたが、その五十年前まで元の祠堂があったとの「故老ノ聞伝」があるという（したがって、綱村の建立は正確には再建）。郡司（郡奉行）の河東田長兵衛定恒が平泉の衆徒と議して綱村に進言し創立に至ったものであるが、その経緯を松島瑞巖寺の通玄和尚が祠堂上梁文に書いた。友直はそれを全文引用している。

義経の靈廟の「大功徳主」として仙台藩主が登場してきていることに注目しておかなくてはならない。仙台藩によって高館での義経の死が公的に管理されたことになり、そこから不死蝦夷渡り説が生まれ出ることはいえないだろう。友直は、白旗大明神と号するようになったのは「近世」のことで、義経甲冑の像は宝暦年中（一七五一―一七六四）の造立で、古像の再興ともいうとしている。また、『盛衰記』が記す、面長・短身・色白・出齒などという義経の容貌をあげて、『勲功記（義経勲功記）』の容貌記載について我は信じないと述べている。

友直によれば、義経堂は死に場所であって遺骸を葬った場所ではない。義経の墓は栗原郡三迫荘沼倉村にあり、義経が高館で自殺後、沼倉小次郎高次がこの地に義経を葬り、墓を築いたものとする。高次の館址がこの場所の山上にあり、往昔武蔵坊が逍遙したことから弁慶峰と称するようになったという。また、胆沢郡衣川村の妙好山雲際寺（昔天台宗、今は曹洞宗）の寺中に義経の位牌があり、「通山源公大居士」とあるが、由来は不明としている。『平泉雜記』

（南部叢書本）の「義経墳墓」の項にも同様の記述があるが、それによれば、沼倉の義経墳墓は『邦内名蹟志』に出ていることを明らかにしている。『邦内名蹟志』（佐藤信要著、寛保元年・一七四一跋文、『仙台叢書』第八卷）は、信要が仕えていた仙台藩郡奉行の萱場高寿の命を受けて、佐久間洞巖（仙台藩儒者）の『奥羽観跡聞老志』（享保四年・一七一九）の誤りをただすために現地を踏査して書かれた地誌である。友直はこの書をたびたび引いているのは、「実地」の学として信頼を置いていたからであろう。

義経蝦夷渡り説に関連して、『平泉雜記』の記載で触れておかなくてはならないのは、「蝦夷風土考之説」として引用されている『蝦夷風土考』なる書である。かの地の「淨瑠璃」に義経が幼歳の頃蝦夷地に渡り、八面大王の娘と通じて大王の秘蔵する「虎ノ書」を盗み取り、小舟に乗って本邦に逃奔したという、例の御伽草子の話を始めとして、東夷（東蝦夷地）クルの義経の宮、蝦夷地の六条ノ間の弁慶崎、「楸サキ」（義経の楸形）、源公すなわちヲキクルミ、といったことなど、蝦夷地の義経伝説を記している。

すでに指摘されているように、この書は『蝦夷随筆』の異本である。⁽⁵⁾『北海随筆』（元文四年・一七三九）の名のほうに知られているが、元文二、三年に金座後藤庄三郎の配下として蝦夷地の金山を踏査した坂倉源次郎が著したもので、書名もまちまちに伝わったように世上にかなり流布した。友直はこの『蝦夷風土考』について、紙数が十四、五枚で松前のことを詳に記したもので、宝暦二年（一七五二）頃の作、しかし誰人の作かわからない、写本であると言明している。流布した写本の一つを友直も見ただことになるが、内容上のコメントは何もつけていない。『北海随筆』はそれらの伝説を疑い深く書いていたから、蝦夷渡り伝説は信用ならない証拠として引用しておいたのかと思われる。

二 『義経勲功記』『鎌倉実記』批判

相原友直は、前節でみたように義経蝦夷渡りを説く「近世」の『義経勲功記』や『鎌倉実記』などを信用できないとして採用しなかったが、もうすこし友直の両書に対する批判に耳を傾けてみよう。

まず『義経勲功記』であるが、馬場信意（一六六九―一七二八）が京都の書肆から正徳二年（一七二二）に出した版本である。信意は京都の人で、『源氏一統志編』『朝鮮太平記』『北条太平記』などを著し、軍記物を得意としていた（『国書人名辞典』第四巻）。『平泉雜記』の「義経勲功記」の項に述べる。備中の安達東伯という者が諸国に遊行して、平泉に来たさい、常陸房海存が仙人となって残夢と名を改め平泉へ折々往来するのに逢い、残夢が昔の物語をするのを聞いて一つの書にした。それを京の馬場玄隆信意が潤色して一部二十巻の書とし、義経勲功記と名づけた。正徳二年頃の作なので、東伯が残夢に逢ったのは元禄・宝永の間（一六八八―一七二一）のことであろう。その書は全編残夢の談話であると言っているが、実際には古来の記録に拠って書き、その間に「詐偽」をまじえ、古来の説に違い、「新奇」の「怪談」を設けて、「愚蒙」を欺き喜ばせるにすぎないものである。「具眼」の人は明確に「虚実」を論じなくてはならない。『義経勲功記』の「杜撰」な点は枚挙に遑ないが、ここに一、二挙げて注意を促しておくというのであった。

その具体例として、東伯が衣川辺に逗留して逢隈川の清流に「凡心」の垢を洗ったという箇所、また、義経が平泉に在りし日、逢隈川の川筋をさかのぼって川上を遊覧したさい、「異人」に逢い、弁慶・海存の三人が「人魚」という物の肉を与えられ、おのおのこれを食べ、長寿を得て三人とも「仙人」になったとする箇所、および、その「細

註」に衣川は駒形嶺の麓より流れ出て逢隈川に流れ入る、逢隈川は大川なり、衣川は小川なりと書かれている箇所を取り上げる。

友直の按ずるところによれば、残夢や東伯がいう逢隈川は北上川のことである。北上川の源は南部領岩手郡より出て、数郡を経て仙台領に入り、胆沢・江刺を過ぎ、岩井に入って平泉を経て数郡を過ぎ、鹿股で二つに分れ、牡鹿・本吉の両郡で海に注いでいる。また、阿武隈川の源は白川（白河）領の甲子山で、白川城辺より上流を妻恋川といい、下流を阿武隈川といっている。伊達郡を過ぎて仙台領に入り、伊具・亘理を経て、荒浜で海に落ちる。逢隈は仙台封内の南方の大河、北上は北方の大川である。平泉の北上川より亘理の逢隈川までは大概、三日余の行程になるほど隔たっている。それを、残夢が北上をさして逢隈というのか、夢中の語に似ている。信意が再撰のとき、両老人の「老語」にしたがって、黒白を弁じなかったのはどうしてなのかと指摘する。友直がこのことを談じていたとき、ある人に、今の北上川を昔は逢隈川といったかもしれないではないか、みだりに難ずるものではないといわれたことがあった。友直がこれに反駁して、すでに田村將軍東夷征伐の延暦二十年（八〇二）の頃、達谷窟の寄文に「東へ限北上川」とあるのをみれば、残夢以前よりその名のあるのは疑う余地がないと答えたという。

また、次のようにも述べる。『勲功記』卷之三に、平泉の繁昌を記しているが、これはまったく『東鑑』から採ったもので、『東鑑』の伝写の誤りを知らないで、奥六郡の中の和賀を加賀としたり、嘉保の暦号を康保と書いたりしている。これらをみれば、『勲功記』がいかにも「偽」の作であるかわかるであろうと、指摘するのであった（『義経勲功記』の項）。

残夢の話というのは、『平泉雜記』の「残夢伝」の項に「羅山翁ノ神社考ニ曰…」と記して引用しているように、

林羅山（一五八三―一六五七）の『本朝神社考』（寛永末年・一六四〇年前後成立か）に典故がある。『神社考』によれば、奥州に残夢という者があって、時々人と語るに、元暦・文治（一一八四―一一九〇）のことを、そのとき義経が何をした、弁慶がどうした、平家とどこで戦ったなどと親しく見てきたように語ったという。残夢の長生は枸杞飯を好んで食べていたからで、人が怪しんで常陸房海尊かと聞くと喜んだというのであるが、むろんそこには義経の蝦夷渡り説などまったく語られていない。『義経勲功記』は、『本朝神社考』の残夢を利用したのだと見抜いていたのである。残夢のことは『神社考』ばかりでなく、浅井了意『狗張子』（元禄五年・一六九二年刊）など、多少の変化の幅を持ちながら語られ、世間受けする話であった。

『平泉雜記』は別に「常陸房海尊」という項を設けて、『俗説弁（本朝俗説弁）』（井沢長秀著、宝永三年・一七〇六刊）の論を引用している。「俗説弁」に、海尊は義経に仕えたが、高館の合戦の前に山中に逃げ入り仙人となり、今に至り富士・浅間・湯殿山などに出現するという。しかし、海尊のような者は君を捨て生を貪る不忠の神仙にすぎず、海尊は常人より長命だとして今にながらえて所々に出現すると言い伝えるのは拙い、というのが『俗説弁』の見解であった。友直はこれを受けて、享保年中（一七一六―一七三六）に常陸国阿波大杉大明神の流行⁶について論評している。この大明神は海尊を祭り、靈験のことがあり、ここかしこに飛んでいくといい、遠近の人が信仰し、その神輿を近国へ担い、江戸の方まで担って、老若これを尊崇することがおびただしく、ついに「公」（幕府）から禁止されることがあった。友直はこれについて海存の靈験などではなく、「妖僧奸巫」などが偽りをなし「愚昧者」を惑わしているものであって、戒めなくてはならないと述べている。友直の合理主義的な態度がここにも表れている。

『義経勲功記』とともに強い批判の対象になったのが加藤謙斎『鎌倉実記』（享保二年・一七一七刊）である。謙斎

は京都に出て医者をしていた人で、医学・本草関係の著作が多かった。友直は『平泉雜記』の「弁清悦物語」のなかで、「近世」の『義経勲功記』と『鎌倉実記』十七卷目などは、とくに後者を念頭に置きながら、『清悦物語』を基本にして「潤色」し作ったものであると暴いてみせる。その『清悦物語』とはどんな物語なのか。

友直は「清悦伝」の項を設け、佐久間洞巖の『聞老志』の記述を引用している。これは、洞巖が「俗間」に「文治ノ旧話記」を得たものという。「州人」（奥州人のことか）が伝えている。むかし平泉に清悦と号す「異人」がいた。洛陽の産で予州君（義経）にしたがって東行してきた。予州が泰衡に殺されたあとも生き続け、「旧事」を説くに世に伝えていることは異なっていた。剣術をもって人に教えていたが、その容貌は歳月経ても壮年のようだった。郷人が怪しんで清悦に聞く。答えるに、同輩とともに魚を釣って遊ぼうと、衣川の源をきわめて行くと、仙境の老父に出会い、「人羹^{ニンカウ}」という赤肉をもらって食べた、そうすると身体が「壯健」になるのを覚えた、という。この人は寛永の頃まで「人間」（世の中）にみえたが、その終わりはどうなったかわからない。およそこのような話だった。

友直によれば、洞巖のいう「文治ノ旧話記」とは今に知られている『清悦物語』のことで、洞巖による清悦伝の全文は『清悦物語』をもって書いたに等しいものであった。『聞老志』が残夢のことは清悦を髣髴させるといい、同じ人でありながら伝が異なっていることかと理解していたことも、友直は付け加えている。友直は「弁清悦物語」の項で、『清悦物語』についておよそつぎのように紹介している。

「俗間」に『清悦物語』という一冊の書がある。小野太左衛門という者が寛永六年（一六二九）二月に、清悦という人に問うて、義経の下向より滅亡に至るまでの話を筆記した。太左衛門は村田御曹子右衛門ノ大夫なる人の家臣という。予（友直）は正徳五年（一七一五）の頃、四、五十年以前の人がその書を写したのを見た。文の拙さや「迂

誕」などところを見れば、「俗間」で書写され伝ってきただけで、印行の書ではないだろう。清悦は義経の家臣にして、二〇歳頃、義経に従って京都より平泉に下り、「異人」に会って異物を食べ長生した義経の臣四人の一人で、寛永七年（一六三〇）まで存命して平泉に住んでいたという。太左衛門は清悦を師として兵法（剣術）を学んでおり、昔のことを聞いて書き記したという。とすれば、寛永七年まで、清悦は四七〇〜八〇年も長生したものであろうか、と。

このような『清悦物語』をネタ本にした「近年編集流布」の『鎌倉実記』は義経の雑色喜三太の名を清悦としているが、そうだとすれば喜三太が長生した者になり、いぶかしいことである。『鎌倉実記』の書は「造言付会」が多く信用しがたい。このように友直は批評し、前述の『義経勲功記』『鎌倉実記』は『清悦物語』を基本に潤色したものにすぎないと断じていくのである。そもそも、清悦が太左衛門に談話した、義経は生害し、「異人」が与えた肉を食べた四人の者は敵の中に翔け入っても殺害する者なく生き残ったとする語りは「抱腹絶倒」ものだというのが、友直の『清悦物語』の受けとめかたであった。

また、「猫間淵」の項でも、『鎌倉実記』が『清悦物語』に拠っていることを暴露する。『清悦物語』に、泰衡の下知で長崎四郎等が大将となって軍兵を率い、義経を討とうと高館に押し寄せたとき、北上川が一面洪水となり波浪が岸を打ち、長二丈ばかりの大蛇が二足あらわれ、長崎を背上に乗せて水に入れ溺死させたとある。『鎌倉実記』にも同様この蛇の出たことを載せて、高館没落の一条は「雜記小説」より取ったと書いているのは、『清悦物語』のような書に拠って「奇怪ノ妄説」を著した証左であるというのである。

『鎌倉実記』に対する批判は以上にとどまらない。同書は『金史別本』なる偽書を仕立てて、義経が金国に渡ったかのように人々を欺こうとしたことはよく知られている。友直は『金史別本』が偽書であるとまでは見抜いていない

が、「弁鎌倉実記」という項を立て、日本の源義行なる者が金国へ渡ったという『鎌倉実記』の説が、『金史別本』にあることから、それに引き合わせようとして、いかに多くの「偽言」を設けたものであるか、また「正史」に齟齬して「紫朱」を混乱させるものであるかを証明してみせようとした。そのため、まず「金史ノ文」を「国字」に直して掲載し、「童蒙」に示している。

ここでは友直の読み下しをさらに要約しておく。「金史列将伝」にいう。範車国の大將軍源光録義鎮なる人の父は日本の陸華仙という所の権冠者義行である。義鎮は始め新靺鞨部に入り千戸邦の判事となった。咸京録事の官を経て、金の二代目章宗の詔により光録大夫の官となり、大將軍に任じられた。範車城を守護し北方の諸国の押えとなった。義鎮の父である権冠者義行は往昔章宗の恩顧を蒙った。総軍曹事の官として北鋌に入り、蘇敵を破った。都に帰り幕下に属し、範車城を築いて守護した。その頃北天竺に攻め入り、龍海を渡って一つの島に至る。この島に伊香保の行辰という老仙人がおり、義行はこの人に帰依し尊敬して長命を得た。その後、唐土と往来し、現われたり隠れたり定まることがなかった。

友直は按ずる。『鎌倉実記』の作者は義経をこの『金史』に出てくる義行の名に引き合わせようとしている。義行の名は、義経の訓が後京極良経と同じであることを忌み、頼朝勘気の後には鎌倉で名付けたものであるにもかかわらず、それを秀衡が名付けたように言い紛らわし、唐土までも義行と名乗ったという。基本を決定しておき、これに細註を付けて潤色、評論し、「雑記小説」によって記したので信用したいと書いているが、何たる言か。信用したいことをあげて、人を惑わすものに他ならない。『勲功記』の義経が蝦夷に落ちたというのと、「事実」が大きく異なっているものの同日の談である。『金史別本』に義行が仙人になったように書いているのは、好事の者が伝聞して筆

記したものであろうか。日東の陸華仙は日本の陸奥氣仙郡のことか、または栗原の華山のことであらうか。陸華仙という所が往昔あったのか聞いたことがない。義行という者が金国へ渡ったというのは虚説でないかもしれないが、義行を義経とするのは理において不当である。義経は智謀武勇、他に恥ずることのない猛将である。平家追討の中、自分の意に合わないことは頼朝の下知であっても聞かなかった。義経が金国に逃れたとしても、敵対した方が改めて呼んだ名を、外国にあって名乗る必要があるのか。金の源義行は陸華仙の義行であって、源義経でないことは分明である。『鎌倉実記』の作者が、たまたま『金史別本』のなかに似ていることを見つけ、しかも義経が松前へ渡ったとする「俗談」もあることから、このように付会したのであらう。「童蒙」をあざむく手段といわなくてはならない。このように、友直の批判は厳しかった。

『鎌倉実記』の作者加藤謙翁は実記とは称しながらも面白い読み物を提供しようと考えただけの企みにすぎなかったかもしれないが、『金史別本』に惑わされた人々が多かった。仙台藩の儒者佐久間洞巖もその一人で、『金史』という外国の書であるがゆえに信じてしまった。新井白石（『新安手簡』）や篠崎東海（『和学弁』）によって偽書であることが判明する。しかし、それによって義経の金国渡海説がたわごととして忘れ去られたわけではなく、新たな義経物語を發展させていく跳躍台になってしまった。相原友直は白石や東海の偽書暴露をおそらく知らなかったが、友直の独自の考証によって、義経が義行と名乗るはずがないという一点から潤色・付会を読み取っていた。

『鎌倉実記』の杜撰ぶりはそれにとどまらない。『鎌倉実記』の中に南部戸頭武国という者が出てくるが、建久以前のことであるのに、奥州の北方をさして南部と称する証拠はなく、これは「詐ノ説」だと批判している（「南部戸頭武国」の項）。また、『鎌倉実記』の作者が弁慶を評して、その武勇は天下後世に至り童子婦人までも知れ渡った事実

であるかのように書いているが、義経起兵の初めから今に至るまで弁慶の勇力武功の事実を記す実録を見たことがない。博識の人を待ち、疑問をなくしたいとも述べる（「弁慶筆跡説」の項）。

『義経勲功記』『鎌倉実記』の二書のほかに、友直によって批判にさらされた書物などがある。たとえば『北条九代記』（浅井了意著か、延宝三年刊）に対して、頼朝の奥入りのことはまったく『東鑑』に依拠して書いているにもかかわらず、『東鑑』に異なることが多いという。それは、世人に売ろうとして、「造言」をなして原文を偽り飾っている、原文に伝写の誤りがあってもそれを考えることなく、その説に従っているとすることも多いなどと、誤謬の訂正の必要性を指摘している（「北条九代記頼朝奥入」の項）。

また、『和漢三才図会』（寺島良安、正徳二年序、刊年不詳）に対しても、平泉中尊寺や達谷のことは甚だ誤っていると容赦ない。この書の作者は『東鑑』などの「正史」の説を考えずに、「文盲」な回国僧などの談話を聞いて書いたであろうという。自分も『平泉実記』に、大関山のことを書いたさい、ある人の話を聞いて今宿村を金森村、千住寺を千手寺と書いた。後で行ってみると、今宿は山の麓にあり、千住寺は山の頂にあった。無耶の関と言って無耶の観音堂があり、千住寺という小寺であった。友直は自分が誤ったことを後悔していた（「和漢三才図会絵之語」の項）。人の話を信じて書いてはいけない、という教訓を『和漢三才図会』にも感じたのであった。同書は、中尊寺の鐘は桜川より出たとしているが、これは虚説で、『図会』の書は平泉中尊の事に関してはすべて妄説が多く、取るにたらないと、他でも述べている（「毛越・中尊両寺之鐘」の項）。

友直は前述のように、『清悦物語』という「俗間」の書にも批判の矛先を向けていた。『平泉図』もそういった「俗間」に伝わってきたものであった。『平泉ノ図』は秀衡の時に写した図だといわれているが、友直がこれを写し取っ

て熟覽してみると、秀衡の時代の図ではなく、後世になって、里人の語り伝えをもとに好事の者が作ったものであることがわかったという。『東鑑』には中尊寺の堂塔が四十余宇とあるが、その図を見ると、今の世に残る堂社と、言い伝えとして知られる跡を図に載せているだけで、『東鑑』の数に合わない。禅房も今、両寺を合せて三十六区残るが、そのみが図にある。諸士の宅地や市井を描いているが、諸士の名も町々の名も記していない。堂塔のある場所も違っている。このことから後世の人の手になることを知ったというのである（「平泉図」の項）。今日、中尊寺の子院利生院蔵の『平泉古図』やそれをもとにつくられた絵図が伝存しているが、友直はそれを見たのであろう。いずれも近世城下町の姿をしており、江戸時代の知識がなければ描けないものであることが明らかにされている。⁽⁷⁾友直はすでに『東鑑』の記載と比べてみることで、当時の時代を伝えるものではないと認識していたことになる。

「俗間」に伝え人口に膾炙している、「きのふたちけふきて見れつ衣川裾の綻さけのほるらん」という「衣川歌」の典故にも拘りを見せている。友直がある日『南部根元記』の写本を見てみると、天正十九年（一五九一）九戸征伐の凱陣で、糠部から召し連れた蒲生氏郷の千人夫の者が衣川に鮭が上るのをみてこの歌をうたったとあり、『南部根元記』が出所かと思った。ところが、その後、『藻塩草』（宗碩著、永正十年・一五一三年頃成立）を見ると、衣川が絹川となっている歌があった。そこには出所が記されていないが、絹川を衣川の文字に換えて詠んだのではと気付いたというのであった。友直はこのような経験から、自分の家に蓄えた書籍の乏しさゆえに、広く考え探そうとしてもできない、この『平泉雜記』を編むにあたって、その「徴」^{シルシ}（証拠）を取るのに暗く、人を誤らせているのではないかと謙虚な気持ちであった。しかし、古来「口碑」に残っていることを記録しておかなければ、後に自分に似た癖を持つ者が調べるときの便宜にならないだろう、自分の杜撰を笑われてもよいのだという気構えを示している。この

「衣川歌」のことも載せるほどではないにしても、その来由を知らない者の惑いを解くために挙げたのだと述べていた（「衣川歌」の項）。後の世の人のために、調べてわかったことをきちんと書いておきたい、そのような学問の人であった。

三 正史・野史・郷説

『平泉雜記』には批判の対象であれ引証のためであれ、さまざまな書があげられている。友直ばかりではないが原文主義のようなところがあって、原文をきちんと示してみせ、それに愚按ずるというかたちで自らの考えを述べるというスタイルが採られていた。友直は前述したように、所有する書籍が乏しいため博搜に不便を感じ、考証の不十分さを述べていた。『平泉雜記』が挙げていた書籍として、列挙するのは省略するが、百種近くが挙げられている。平泉関係の書としての数であるから、決して少ない数ではない。友直はこれらの書物に階層的な序列を与えていた。すでに述べてきたので気付かれることであるが、「正史」と「野史」との区別、「野史」でも比較的古い時代のものと、「近世（近代）」のものとの区別、また書肆から出版された版本と、そうではない写本として流布した「俗間」の書との区別、さらには書物にはなっていない「郷説」「俗説」としての言い伝えレベルのものまで、友直が視野におさめ、利用しかつ批判を加えていた。

これらの各レベルの書物のうち、友直が最も信頼を寄せていたのが「正史」すなわち『東鑑』であった。それは「義経渡蝦夷」の項で、私論を捨て公論に従い、野史を取らず正史を採ると述べていることに象徴的に表れていた。『平泉実記』序の冒頭に『東鑑』は「実録」である、もって鑑すべし、証すべしと記している。「近世」になって「坊

中」(巷間)に出版された「野史」は虚実混淆し、その書は利用するにあたらなない、かつて平泉・達谷のいにしえを現地で聞いたところと合わせると、その過半が「誕妄」であるとし、「野史」とくに「近世」の「野史」を退けていた。「正史」は国家によって編纂された歴史書、「野史」は在野・民間で撰述された歴史書のことであるが、「正史」と「野史」との区別が明確に意識されていた。

「正史」を最重要視する友直の態度は正史主義と言ってもよいが、しかし、その記述をすべて正しいと考えているわけではなかった。「東鑑ノ地名ノ訓、今称スル処ノ地名ト違ル者アリ」(「東鑑ノ訓点」の項)、「東鑑ニ、古津天良ト訓セシハ誤ナルヘシ」(「骨寺」の項)などと、「実地」の立場から間違いを指摘することが少なくなかった。今日でも鎌倉幕府の関係者によって編纂された『東鑑(吾妻鏡)』は、幕府滅亡によって失われた幕府史料の欠を補う基本史料としての価値が高い。友直の『東鑑』に臨む態度は今日の中世史家とそれほど違うものではない。

むしろ、編纂に使われた文書類が第一次史料であることはいうまでもないが、原文書主義は友直にもあてはまることであった。『平泉雜記』巻之四に、古来中尊寺に相伝する「清衡経蔵寄文」「頼朝卿御下文」「学頭職補任状」などの文書を全文掲載し、友直の「愚按」がつけられている。しかも、友直は原文書ではなく伝写本を写したために「亥豕ノ誤」のあること計り知れないと、厳密さを求める人であった。伊達綱村の「義経廟上梁文」を全文掲載したのも同様である。

書物のなかでは、『東鑑』は別格として『義経記』はある程度信用がおけるといふ評価であった。「義経記」の項で、『可成談』にある「曾我物語・義経記ハ拙キ物ナレト、時代ヲイハ、太平記ナトヨリハ前ノ物也…」という記述に触れて、『義経記』は「近世出ル処ノ偽書」とは異にして信用すべきことが多い、しかし誤りもまた少なくない、年月

日時の齟齬、地理・人名の誤謬など枚挙するに遑ない、正史と突き合わせて考え扱わなければならない、と述べている。また、『義経記』の姉齒の松の記述を引用し、『義経記』に記す地理・方角は疑うべきことが多く、ことごとく信用しがたいとする（『義経記』の項）。「基成」の項にも『義経記』は謬誤が多いので、正史と照合して判断すべしと繰り返している。

『義経記』や『盛衰記』にはある程度の価値を認めていたが、「近年編集流布」の『野史』である『鎌倉実記』『義経勲功記』などに対しては、新奇・誕妄・杜撰・偽作などと最大限の非難を浴びせていた。改めて繰り返すまでもない。『平泉実記』凡例に、この書は頼朝の泰衡征伐を書くのが目的であるが、「近来平泉の事を載るの書誕妄にわたる者多きが故に、今是を訂し実^{じつ}に帰して旧蹟をたづぬるのたよりとせんと欲す」と記している。『平泉雜記』にもそれが当てはまろう。執拗な批判を繰り返したのは、事実が面白おかしく捻じ曲げられ、それが語られ通用していくことに、地域史からかけ離れた歴史の捏造を感じていたからに他ならない。

これらの近世出版の信用ならない書とともに、「俗間」に伝わる書の類もあった。『清悦物語』がその最たる書といえ、『鎌倉実記』などの妄想をかきたてるネタ本になっていたと友直は指摘していた。また他に、『光堂物語』なる一冊を友直が「俗間」に得て、その虚実を関山中尊寺の僧某に問うことがあった。僧某によれば、『西京雜記』『西陽雜俎』『輟耕錄』などに類することが書かれているとの評言であったが、「奇怪」なことも捨てるに惜しく、同士の談柄の助けにここに載せるとして、引用している（『光堂物語』の項）。「俗間」の書であっても、無視・放置するのではなく、論評の対象にすべきとの態度であった。「俗間」に伝わるという点では、前述の『平泉図』や「衣川歌」も含めてよいだろう。

友直の史実考証のうえで、「東鑑」を補い正すものとして重視されていたのが「郷説」である。「里老ノ説」「古老ノ説」「村老ノ説」「古来郷俗言伝」「郷人伝説」「俗説」「里俗ノ曰」「里人ノ説」「郷俗ノ説」などとも書かれる。いちいち事例はあげないが、「秀衡之家臣」の項で、秀衡家臣の名前を『東鑑』『清衡経蔵寄文』『義経記』『郷説・里老ノ説・村老ノ説』から拾い出し列挙しているが、友直がたまたま「記録」または「郷説」に残るのは右の者たちで、「近世印行ノ書」に著わされた人物については信用しが多いのが多いので、挙げなかったとしている。ここに「郷説」重視の態度を窺うことができる。たびたび引き合いに出すが、『平泉実記』凡例に「諸書散出の説をあつめ、伝聞村老の談をえらまず、証すべきものを録す」という態度は『平泉雜記』にも一貫していたといえよう。付け加えておけば、地域伝承とは関わりない義経蝦夷渡りの「俗談」（『弁鎌倉実記』の項）の類とは明らかに区別されていることは注意しておきたい。

以上の他に、友直に先行する仙台藩の地誌も利用していたので、そのことにも触れておかねばならない。佐久間洞巖の『奥羽観跡聞老志』と佐藤信要の『邦内名蹟志（名跡志）』の二書が引例されている。洞巖は『義経勲功記』や『鎌倉実記』に惑わされ、義経が蝦夷へ渡り女真へ至ったと信じてしまったが、友直はその誤りを指摘していない。洞巖が師匠にあたるからであろうか。一方『邦内名蹟志』に対してはどうか。仙台領内の田村將軍建立堂社を調べるにあたって弟子にその書を参考にさせ、それに付け加えて二ヶ所を挙げているように、利用できると考えていたのは確かである。しかし、批判は加えていた。たとえば、玉造郡上宮村池月沼について、俗説に佐々木が乗った馬はこの池月の出だと『名蹟志』に載っているが、それは「妄説」であるとか（『生啜磨墨』の項）、『東鑑』に高館が衣川館とあることから、『名跡志』が高館を頼時の衣川柵としているのは甚だ誤りで、基成・義経のいた衣川館と頼時の

衣川柵とは同所でないことは『東鑑』をよく考えれば分明的と述べていた（関山中尊寺之号）。友直には先行の仙台地誌を批判的に乗り越えようという意図が働いていたに違いないのである。

おわりに

相原友直の史実考証の方法は、『東鑑』を重視する正史主義の立場にたちながら、全体の文脈のなかで考える、実地に即して考える、郷説によって裏付ける、新奇な説を排除する、正史といえども絶対視しない、そのような学問的な態度に徹しようとしたところに特徴が認められる。こうした学問的方法的確信に裏付けられて、「偽書」の「妄誕」を告発し、義経の蝦夷渡り伝説は新奇に我慮に基づいて作りだされたものであることを暴くことができたのであった。ここでは義経蝦夷渡り伝説に限って述べたにとどまるが、田村麻呂伝説などにおいても友直の考証は着目されてよいし、近世の平泉研究の水準という点での評価も必要であるように思われる。さらに、その後の仙台藩の学問的継承にも大きく寄与しているに違いない。今後の課題としたい。

友直は「郷人の伝説」をむやみに信じようとはしなかったし、かといって切り捨てて顧みないというのでもなかった。実地の重視、すなわち土地で語られていたことを大切にしながら、文献史料と伝説の突合せ、緊張関係のなかで正否を判断しようというのであった。それが諸説紛々で決めかねるなら、後人の人の考察にゆだね事実が一つに帰することを期待した。伝説への素朴的な信仰といってよい思い入れが今日でさえ、いたるところに蔓延しているのをみると、友直の格闘は決して色褪せていない。

ただ、友直のいう「郷説」、それは「里老」「古老」「村老」によって語られた土地の伝説・言い伝えをさしている

が、それ自体がはたして古くからの歴史性を担保しうるものなのかという点が明確に意識されていたわけではない。伝説は語られた時点での真实性（もっともらしさ）にすぎず、古き事実を証明しているものではなくない。そう考えなければ伝説研究は出発点に立っていないが、友直の著作に限らず、近世の地誌・紀行類にたびたび「土人の説」なるものが紹介される。「郷説」や「土人の説」のなかにどのように分け入っていけるのか、本稿を通して大きな課題に直面してしまっていると思う。

〈注〉

- (1) 義経蝦夷渡り伝説に関する拙稿に、①「義経『蝦夷征伐』物語の生誕と機能」(『史苑』四二巻一・二号合冊、立教大学史学会、一九八二年、のち『幕藩体制と蝦夷地』雄山閣出版、一九八四年再録)、②「蔓延する『義経北行伝説』―伝説をいかに解体するか―」(北海道・東北史研究会編『北海道・東北史研究』第二号、サッポロ堂、二〇〇五年)、③「義経蝦夷渡り(北行) 伝説の生成をめぐって―民衆・地方が作り出したのか―」(『研究年報』第三十九号、宮城学院女子大学附属キリスト教文化研究所、二〇〇六年)、④「義経蝦夷渡り伝説の地方的展開―三既の観世音縁起をめぐって―」(『研究年報』第四二号、二〇〇九年)がある。義経蝦夷渡り(北行伝説)を扱った類書は多いが、そのなかで森村宗冬『義経伝説と日本人』(平凡社新書、二〇〇五年)は義経蝦夷渡り説の生成・展開を「義経生存説運動」としてとらえ、そこに敗者復活・自己肥大化幻想を読み取り、「判官びいき」の害毒の大きさを論じ、それをやめるべきだと提案している。義経蝦夷渡り説の生成を「義経蝦夷共和国の完成」だと捉える点など同意できない面も少なくないが、蝦夷渡り伝説の機能・本質に迫りえている一冊である。

- (2) 『仙台人名大辞書』(仙台郷土研究会、二〇〇五年復刻版、一九三三年刊)、『国書人名辞典』第一巻(岩波書店、一九九三年)。

(3) 編輯兼発行者岩崎克己『義経入夷渡満説書誌』(一九四三年)。森村前掲書、および前掲拙稿③など。森村は相原の『平泉雑記』の「義経生存説批判」について「反証をあげての反論というよりは、感情的非難という色合いが強い」と評価し、同じく批判説の伊勢貞丈ともども「合理性をもって同じ土俵に乗ったことで失敗し」た、「非合理は合理を駆逐する」例だと指摘している。しかし、知識階級に属する人たちでさえ、ほとんどの人々がそれを真に受けてしまう合理・非合理の線引きが不明瞭な江戸時代にあつて、大勢に吞まれず批判しえた数少ない一人であることについて、むしろ積極的な意義を認めなくてはならない。「感情的非難」というレベルなのか、相原友直の史実考証方法に立ち入った検討を必要としている。郷土・地域研究における合理的・実証的精神の先駆という姿が浮かんてくるはずである。

(4) 相原の平泉三部作の利用にあたっては、平泉町史編纂委員会編集『平泉町史』史料編二(平泉町、一九九三年) 一〇二二頁による。引用頁は示さず、「目録」の項目を本文に示すにとどめた。

(5) 岩崎前掲書によると、「義経伝説に関する限りにおいて、『蝦夷随筆』の異本の一つにすぎない」と指摘している(九五頁)。
(6) 阿波大杉大明神の流行は享保十二年(一八二七)である。大島建彦編著『アンバ大杉信仰』(岩田書院、一九九八年)などの研究がある。

(7) 斉藤利男『平泉―よみがえる中世都市』(岩波新書、一九九二年) 五〇～五二頁。

〈付記〉 本稿は科学研究費補助金基盤研究(C)「北日本地域における田村麻呂・義経伝説の近世的展開」(二〇〇八～二〇一〇年度)の研究成果の一部として発表されるものである。